

日本文学全集
40

森 鷗外
(二)

護持院原の敵討・大塩平八郎・堺事件
渋江抽斎・追儼・普譜中・かのように
藤棚・羽鳥千尋・他

河出書房



森 鷗 外 (二)



カラー版日本文学全集 40

1971©

昭和四十六年十二月十五日 初版印刷
昭和四十六年十二月二十五日 初版発行

定価 七五〇円

著 者 森 鷗 外

発行者 中 島 隆 之

印刷者 草 刈 龍 平

装幀者 亀 倉 雄 策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製 本 加藤製本株式会社

製 函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話・東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0393-331140-0961

目次

森 鷗外 (二)

生田川 七

護持院原の敵討 三

大塩平八郎 六

堺事件 七

津下四郎左衛門 六

渋谷抽斎 八

追 儼 一八

普 請 中 一九

カズイスチカ 一四

ロビンソン・クルソオ	二〇〇
なおりそ	二〇二
かのように	二二
藤 棚	二五
羽鳥千尋	三〇
二人の友	三六
Beriberi und Cholera in Japan	四六
非日本食論は將にその根拠を失わんとす	三六
地下の蘭化が心	三英
ペツテンコオフエル師の七十誕辰	三七
ペツテンコオフエル紗菌を食う	三英

衛生談	二六一
洋学の盛衰を論ず	二六五
勤務ト学会トノ関係	二六九
得利寺	二七一
混沌	二七一
私が十四五歳の時	二七四
鼎軒先生	二七五
「生い立ちの記」序	二七七
戴冠詩人	二七八
クサンチス	二八〇
復讐	二八七

書

簡(抄)

..... 101

注 釈

小泉浩一郎 三〇五

解 説

平川祐弘 三二九

巻頭写真

榎本良介

色刷挿画

生田川 護持院
原の殿討
大塩平八郎 堺
事件
波江抽斎

真道黎明
堅山南風
田中青坪

森

鷗

外

(二)

生 田 川*

人物

蘆屋 処女

高く上げたる髪に白銀の釵子。黄楊の小櫛。時の花（紅梅）の挿頭。淡紫の蒔縷の表衣。紅染めの裾。白地に浪に駕鸕の模様ある薄き裳。錦の裙帶。紫綵の領巾。

腰機に懸かりいるとき傍に袴、空弓を置く。

壁に懸け置く筈は、昔の市女笠。白袴の於須比を被りて戴く。

はいりに置く烏は丹鳥。

処女の母 背後に上げたる髪。細かき杵の櫛。釵子。朽葉色の衣。

茜染めの裳。山藍摺の裾。倭文布の裙帶。織物の守袋に綾染めの紐附けたるを腋に懸く。珠数。

火桶は白木。

壁に懸けたる筈は白き桌の垂衣附けたる市女笠。

はいりに置く烏は秋二毛。

菟会 壮士

烏帽子。款冬色の衣、白き袴。浅縹の蒔縷の襖。烏皮の浅沓。葛巻の小太刀。葛靱に交剣したる鹿矢二列に八目の鳴鏑。

矢一手を表指す。白檀の節木の反高なる弓。

茅渚 壮士

烏帽子。紺の櫛の襖。白き衣。白布袴。鹿夏毛の行膝。毛沓。黒漆の刀子に織物の燵袋。白銀の目貫の太刀。黒

葛靱に懸籠の矢を盛りたるに鉄矢一手を表指す。所々に棒纏したる梓の弓。

法師

鈍色の衲衣。色々の帯を綴りたる黄綿衣。阿闍梨笠。麻鞋。

左手に鉢。右手に白銅の五銖鈴。

（衣裳考証 関保之助）

摂津国菟原郡蘆屋の里なる民家。左手犬黄楊の垣の間に門口。そこに沓。一間の正面の中段より右壁。笠二つ懸く。壁の前に機を立つ。中程より左の方窓。火桶。柳篋のような物。

蘆屋処女、機を織りいる。その母、手を火桶に翳しいる。

母 もう春が近いと見えて、（窓の方を見る）生田川の水がぬるんだと、髪どもが云つていた。わたしのような年寄でも、どうやら炭櫃が疎ましくなつた。（少し火桶を押し遣る）

処女（機の手を停む）ほんにそうでございましょう。此間の雷から時候が變つてまいりました。どうしたわけか、わたくしはこう頭を押さえられるような心持が致してなりませんわ。

母 いやいや。それは時候のせいばかりではあるまいよ。血の道も手伝っているかも知れない。それに年寄って同じ事ばかり云うと思いかも知れないが、あの毎日のようにお出になる二人の方に、いつも暖味な事ばかり云つてお置だもんだから、お前の氣の静まる日はないのだよ。

処女 あ。その事だけは、おつ母さん、どうぞ云わないで置いて下さいね。その事だけは、わたくしは考えても見たくございませんし、申したくもございませんの。考えたり、申したり致すと、わたくしは頭痛が致してまいりますから。

母 それご覧な。お前の頭の痛いのは、春先のせいばかりではないのだよ。お前の言いたくないと云うのを、何もわたしが無理にかれこれ云うのじゃあないが、どうせ何時までもこのままにして置かれるものではないからね。

（処女肩を震めたるが、たちまちまた思い返したる如く、素直に機を下り、母と向き合いて坐す。間）

わたしも初の内は、お前が面白半分、二人の方を綾なしてお出なかつたのかとも思ったのさ。だが、何事に附けても、輕薄がましい事の嫌

なお前の事だから、まさかそんなわけでもあるまいと思つて、よく見てみると、お前は飽くまで真面目だらうじゃないか。わたしもねえ、こうなつて見ると、どうもお前の気が知れなくなつてしまつたのだよ。それでお前の厭がるのを知つていながら、こんな事を云い出すのさ。一体お前はとうしよう云うのだい。

処女 そうでございますね。

母 そうでございますねじゃあ、分らないね。お前だつて何とか思つてお出だから、頭痛もするのだらうじゃないか。一体どうしよう云うのだい。

処女 それはねえ、おつ母さん、わたくしだつて思っている事があるどころじゃございませんわ。思っている事はございまして、どう致す事も出来ないのですもの。

母 変じゃあないか。二人の内どちらかにお前が極めなくちゃあ、治まりっこはないじゃないか。

処女 それはどうも極められませんの。

母 おやおや。それでは矢つ張極めないで置いて、二人であんなにしのを、見ていたいとお云のかい。

処女 なんの、わたくしが、それを見ていとうございましょう。わたくしはそれを見ているのが、つらくてならないのでございますわ。母（少し声色を励ます）どうもそれでは分らないね。この津の国に、服部の女子は沢山いても、お前の織つた繒の値が一番好いと云われる程、何に附けても器用なお前が、二人の男に思われたからと云つて、まさか意気地がなくて捌が附かないと云うわけでもあるまいね。

処女 ええ。おつ母さんがなんと仰（おっしゃ）つても、どう思つて仰（おっしゃ）ることが分かっていますから、わたくしは腹を立てたり捌（さ）ねたりは致しませんの。おつ母さんの仰（おっしゃ）るとおり、わたくしにはあのお二人を釣（つ）つて置くの綾（よ）なして置くのという心持もございせんし、それかと申して、わたくしだつてあのお二人にかれこれ云われるの

で、ただ途方に暮れて、ぼんやり致しているのでもございせん。

わたくしが極められないと申しますのは。

母 ふん。お前が極められないとお云のは。

処女 極められないと申しますのは、それはあの、（徐（ゆる）かに立つ）人間の力に及ばない事ではございまいかと、思うからでございませう。

（二人しばらく無言。たちまち群鳥の羽音、窓のあなたに聞ゆ。処女窓の戸を開け、向うをじつと見ている）

母 なんだい。

処女 あの平張の打つてあるあたりから、鳴が立つたのでございませう。（間）

母 お前が極められないとお云のは、どなたかにお前が極めたら、残る一人の方が、その儘にはおられまいと思（おも）ひなのだらうが、わたしはそうは思わないよ。（処女はじつと外を見ている）そうしたら、一人の方があきらめておしまいなさるだらうと思うがね。（処女はじつと外を見ている）お前はそうはならないと思（おも）ひのかい。

処女（こなたへ向く）それは大変な事になりは致すまいかと思ひますの。

母 はてね。そんならお前が殺されるとか、お前の極めた方のかたが殺されるとか、お思ひのかい。どうもお二人ともそんな気の荒い方

ようではないのだからね。

処女 ええ。そんな気の荒い方々ではございせんとも。

母 それではお前に捨てられた方のかたが死んででもおしまいなさるうと云うのかい。

処女（また母と向き合いて坐す）それは死んでおしまいなさいませう。

母（微笑む）まあ。矢つ張利発なようでも世間見ずだね。

処女 いいえ、きつと死んでおしまいなさいませう。

母 そんなら、お前の大変な事になるだらうとお云のは、その事なのだね。

処女 いいえ。

母 はてね。(しばらく考う) その方に死なれては、お前達が済まないとお云のかい。

処女 ええ。それは二人の間に、亡くなった方の影が立って入らっしゃるのですもの。

母 ふん。お前の考も大抵分かったよ。わたしの考では、少しお前が思過しをしてお出のようだが、わたしだってきつとそうでないとも云われないのさ。しかしそれはお前が出し抜けにどなたかに極めると云ったなら、捨てられた方のかたが、あきらめにくいかも知れない。どうだね。お二人の間で極まってしまうようにしたら。

処女 そんな事は出来ませんわ。

母 (また微笑む) 何故。出来ないには限らないじゃないか。

(菟会壮士、茅渚壮士袖垣の外に現る。二人共人柄詞つき処女と母とよりは、やや時代なり。弓を持ち、鴨一羽ずつを提ぐ)

どなたかお出なされたようだね。

処女 お二人ですわ。

菟会壮士 (一歩下がって、茅渚壮士に) さあ。どうぞお先へ。

茅渚壮士 いえ。あなたこそ。

菟会 わたくしはこの土地のもの、あなたは隣国のお客ではござりませんか。どうぞ御遠慮なく。

茅渚 いつも同じような事を申すようでござりますが、そう仰やると、つい愚痴な事も申したくなります。何故わたくしは思う人と、同じ津の国には生れずに、和泉の国に生れましたやら。

菟会 これはお詞とも覚えません。道が遠ければ、お志の深さも知れるというものではござりませんか。

茅渚 志は劣らぬ積でござりますが、思う人とまだ片生かたはの昔から、お識合しあひのあなたこそ、お羨ましゅうござります。

菟会 いや馴れては目にも止まらぬ習でござります。珍らしく来られたあなたがお羨ましゅうござります。こう申しては、果てしが

ござりません。兎に角お先へ。

茅渚 そんならお許下ゆるがさります。(柴の戸に手を掛く) 頼みます。

(処女静かに戸口に歩み出で、戸を開く。三人顔を見合せて思入あり。しばらく無言)

処女 どうぞおはいりなさいまし。

茅渚 御免下さい。

菟会 御免下さい。

(二人の壮士、処女の母に目礼し、各弓を傍に置いて坐す。母の位置と三角形になる。処女は戸口に近き処に突居る)

母 これはお二人ともお揃で、好うこそお出下さいました。

茅渚 丁度こなたへまいろうと存じまして、あの平張の打つてあるあたりまでまいりますと。

菟会 和泉のお客と落ち合ひまして。

茅渚 鴨一羽ずつ取りましたのを。

菟会 お土産に持ってまいりました。

(二人鴨を母の前に出す)

母 まあ、揃いも揃った立派な鳥でございますね。娘。厨くへ持つて行ってお置。

処女 はい。

(鴨を取りて、右手へ入る)

茅渚 (菟会に) こなたの母刀はとぎ自が、立派なと仰やったので、あの鶴くわの事を思い出しました。あれはまだあのまま浮いておりましようかな。

菟会 きつとあのままおりましよう。どこから飛んでまいったものか、今朝見たときからあの通りにじつとしております。

母 あの、鶴がいたらと仰やいますか。

茅渚 さようでござります。先程二人で鴨を射ますと、近くにいた鴨の群は一度にぱつと立ちましたが、直その向うに鶴が一羽立たずに浮いておりました。小舟を出して射た鴨を取ってまいりました時

も、鵠は静かに波を切つて、二丈ばかり退いたばかりで、矢つ張立たずに浮いていました。

菟会 雪のように真白な、大きな鵠でござります。

母 それはまあ、珍らしい。(少し間を置き、思案した様子にて、膝を進む) こう申すと、なんとやら差出がましゅうござりますが、あなた

方お二人で、その鵠を射て御覧なさいませんか。二筋の矢に鳥は一羽、お中なすつたそのお方を娘の壻に致しましょう。

茅渚 はっ。これは何よりの仰でござりまする。菟会のお方。いかがなものでござりましょう。

菟会 なる程。御尤な母刀自の仰でござります。わたくしも異存ござりませぬ。

茅渚 こういう内も心が急ぐ。直にこれから。さあ。

菟会 さあ。

(二人弓を取りて立つ。処女右手より出で、立ちたるままにて、じつとこなたを見る。二人の壮士、同時に処女の顔を見、さて同時に目を母の方に移す)

茅渚 後ほどお目に掛かります。

菟会 後ほどお目に掛かります。

母 お待ち申しております。

(二人の壮士、柴の戸を出で、左手に入る)

処女 (二人の左手に入るまで、じつと立ちいて、徐かに母の傍に進み、向き合いて坐す) またお出なさるのですって。

母 こん度お出なさるの、多分どなたかお一人で、そのお方がお増さんだよ。

処女 何故なの。

母 (微笑む) 何故だか当ててご覧。

処女 分かりませんわ。

母 (また微笑む) 好い思附があつたのだよ。(間) 実はね、さっき二人で持つてお出の、あの鵠を射なすつたとき、大きな白い鵠が一羽、

鴨が立つても舟が来ても、逃げずに浮いていたのだとき。その話をわたしに聞いて、それを取つて来た方を壻にしよう云つたのさ。

処女 まあ。そんならおつ母さんは、今朝から川に浮いている、あの鵠を取つて来いと、お二人に仰つたの。

母 そうだよ。今朝から川に浮いているとは、それをお前は知つてお出か。

処女 ええ。ここから好く見えますわ。大きい白い鵠ですもの。

母 そうかい。

(間。処女心配らしき様子)

変な顔をお為ではないか。また頭痛がして来たのかい。

処女 いいえ。

母 ではどうしたというのだえ。もしかわたしの云つたことがお前の

氣に入らないのかい。

処女 いいえ。

母 分からないねえ。そんならお前の出来ない云つたことが不思議に出来て、今日一日に極まるのを、悪いと思ではないのだね。

処女 いいえ。それが悪くはございませんの。ただわたくしには久しい間、極まらないでいた事が、そんなに急に極まるのが、恐ろしい

ようでございますの。それにあの大きな鵠を、今朝ふいと見た時から、なんだか氣に掛かつていたのに、あれが射られて極まるという

のも、恐ろしいようでございますの。

母 なんの詰まらない。そういう内に、その鳥はもう射られたかも知れないのだよ。

処女 (独語のように) ほんに鵠はどうしたかしら。

(処女徐かに立ちて戸を開け、外を見る。間)

母 見えるかい。

処女 (見返らずに) ええ。(語氣緩く) 緑に光る水の上に、円めた綿かなんぞのように、真つ白に見えていますわ。

母 二人の方はどうなすつたのだらうね。(間) 川はついそこだけ

ど、道が曲がつて附いているから、まだお出なされぬかも知れない。

処女 あら。

母
なんだい。

処女 白い鳥が大きくなりましたしたわ。(問)羽を広げたのでございまい
ようか。(問)また小さくなりましたしたわ。(問)舟が出ますの。(問)鳥
が流れますすわ。(問)鳥の方へ舟がまいりますすわ。(問)人が二人乗つ
ていますわ。(やや長き問)舟に鳥をいれますわ。(問)こちらへ漕い
でもどりますわ。(やや長き問)鳥に矢が立っていますすわ。矢が二本。
母 なんとお云だえ。矢が二本鳥に立っているのかい。
処女 ええ。(問)舟が着きましたわ。

(母も処女もしばらく無言。処女はじつと窓の外を見ている)

二人で鳥を中に置いて、動かずにお出なさいますの。

母（心配らしい様子）まだ何か見えるかい。

ええ。(間)いつまでも動かずにお出なさいますの。

（長き間二人無言。処女はじつと窓より見ている。鐘の音。窓の外次第に夕映にて赤くなる。この時僧墨染の衣、受糧器を持ちて登場し、

僧

恨くら随ず癡ち煩はん
覆く煩はん慢まん悩のう
悩のう悩のう疑ぎ謂い
嫉し謂い惡あく貪どん
慳けん忿ふん見けん嗔じん
*

母 おや。托鉢の坊様がお出なすったね。いつも朝の内なのに、こんなに遅くなって。

処女（静かに窓を離れて、懸けたる笠を取る）あの、おつ母さん。わたくしは一寸行つて見て来ますわ。

僧

或^レ五^ニ依^ルス
俱^ニ識^ス止^ム
或^レ隨^フ根^ニ
不^レ緣^ス本^ニ
俱^ニ現^ル識^ス

如^に濤^と波^は依^え水^{すい}

母 本當にその鳥に、矢が二本共立ったのなら、お前が行ったつて極まりやあすまいじゃないか。

処女（戸口にて沓を穿く）いいえ、おつ母さん。あの鵲が死にましたので、今日わたくしの身の上が、どうにか極まらなくてはならないように思われますの。（語氣緩かに強く）人間の小さい智恵で、どうしようの、こうしようのと、色々に思いましたのも、夜が明けて見れば、燈火の小さい明りがあるかないか知れないようなものですわ。

僧

非^ひ以^い謂^謂
實^{じつ}有^有是^是
住^じ所^{しよ}唯^唯
唯^唯得^得識^識
識^識故^故性^性

処女 おつ母さん、門に入らっしゃる坊様にお上げなすって下さいよ。

（処女僧に会釈して、戸口にて意を決したる如く早足になり、左手に入る。窓の外薄暗くなる。母柳宮のような物より銭を取りて手に持ち出で、僧に贈る。僧受糧器にて受く）

僧

是^ゼ無^ヒ離^ニ
出^シ得^ズ二^ニ
世^セ不^レ取^ル
間^ヘ思^フ相^シ
智^チ議^ギ故^ニ

(僧入る。鐘の音)

母 おう。娘が門で云つたことは、どういう心で云つたのやら。跡で思えば氣に掛かる。わたしもちよいと行つて見よう。(壁に懸けたる今一つの笠を取る。幕)

護持院原の敵討

播磨国飾東郡姫路の城主酒井雅楽頭忠実の上邸は、江戸城の大手向
左角にあつた。その金部屋には、いつも侍が二人ずつ泊ることにな
つてゐた。然るに天保四年癸巳の歳十二月二十六日の卯の刻過の事
である。当年五十五歳になる、大金奉行山本三右衛門と云う老人が、
ただ一人すわつてゐる。ゆうべ一しよに泊るはずの小金奉行が病氣引
をしたので、寂しい夜寒を一人で凌いだのである。傍には骨の太い、
がっしりした行燈がある。燈心に花が咲いて薄暗くなつた、橙黄色の
火が、黎明の窓の明りと、等分に部屋を領している。夜具はもう夜具
葛籠にしまつてある。

障子の外に人のけはいがした。「申し。お宅から急用のお手紙が参
りました。」

「お前は誰だい。」

「お表の小使でございます。」

三右衛門は内から障子をあけた。手紙を持って来たのは、名は知ら
ぬが、見識つた顔の小使で、二十になるかならぬ若者である。

受け取つた封書を持って、行燈の前にすわつた三右衛門は、先ず燈
心の花を落して掻き立てた。そして懐から鼻紙袋を出して、其中の
眼鏡を取つて懸けた。さて上書を改めたが、伴宇平の手でもなければ、
女房の手でもない。ちよいと首を傾けたが、宛名には相違がない
ので、兎に角封を切つた。手紙を引き出して披き掛けて、三右衛門は
驚いた。中は白紙である。

はつと思つたとたんに、頭を強く打たれた。また驚く間もなく、白
紙の上に血がたらたらと落ちた。背後から一刀浴せられたのである。
夜具葛籠の前に置いてあつた脇差を、手探りに取ろうとする所へ、
もう二の太刀を打ち卸して来る。無意識に右の手を挙げて受ける。手
首がぱたり切り落された。起ち上がつて、左の手でむなぐらに掴み
着いた。

相手は存外卑怯な奴であつた。むなぐらを振り放し科に、持つてい
た白刃を三右衛門に投げ付けて、廊下へ逃げ出した。

三右衛門は思慮の逞もなく跡を追つた。中の口まで出たが、もう相
手の行方が知れない。痛手を負つた老人の足は、壮年の癖者に及ばな
かつたのである。

三右衛門は灼けるような痛を頭と手とに覚えて、眩暈が明して来
た。それでも自分で自分を励まして、金部屋へ引き返して、何より先
に金箱の錠前を改めた。なんの異状もない。「先ず好かつた」と思つ
た時、眩暈が強くなりつたので、左の手で夜具葛籠を引き寄せて、それ
に寄り掛かつた。そして深い緩い息を衝いていた。

物音を聞き附けて、最初に駆け附けたのは、泊番の徒目附であつ
た。次いで目附が来る。大目附が来る。本締が来る。医師を呼びに遣
る。三右衛門の妻子のいる蠣殻町の中邸へ使が走つて行く。

三右衛門は精神が慥で、役人等に問われて、はっきりした返事をし
た。自分には意趣遺恨を受ける覚は無い。白紙の手紙を持って来て切
つて掛かつた男は、顔を知つて名を知らぬ表小使である。多分金銀に
望を繫げたものであらう。家督相続の事を宜しく頼む。敵を討つてく
れるように、伴に言つて貰いたいと云うのである。その間三右衛門は
「残念だ、残念だ」と度々繰り返して云つた。

現場に落ちていた刀は、二三日前作事の方に勤めていた五瀬某が、
詰所に掛けて置いたのを盗まれた品であつた。門番を調べて見れば、
卯刻過に表小使亀藏と云うものが、急用のお使だと云つて通用門を出

たと云うことである。亀蔵は神田久右衛門町代地の仲間口入宿富士屋治三郎が入れた男で、二十歳になる。下請宿は若狭屋亀吉である。表小使亀蔵が部屋を改めて見れば、山本の外四人の金部屋役人に、それぞれ宛てた封書があつて、中は皆白紙である。

察するに亀蔵は、早晩泊番の中の誰かを殺して金を盗もうと、兼て謀つていたのであろう。奥羽其外の凶敵のために、江戸は物価の騰貴した年なので、心得違のものが出来たのであろうと云うことになった。天保四年は小売米百文に五合五勺になった、天明以後の飢饉年である。

医師が来て、三右衛門に手当をした。

親族が駆け附けた。蠣殻町の中邸から来たのは、三右衛門の女房と、伴宇平とである。宇平は十九歳になっている。宇平の姉りよは細川長門守興建の奥に勤めていたので、豊島町の細川邸から来た。当年二十二歳である。三右衛門の女房は後添で、りよと宇平とのためには継母である。此外にまだ三右衛門の妹で、小倉新田の城主小笠原備後守貞謙の家来原田某の妻になって、麻布日が窪の小笠原邸にいるのがあるが、それは間に合わないで、酒井邸には来なかった。

三右衛門は医師が余り物を言わぬが好いと云うのに構わず、女房子供にも、役人に言つたと同じ事を繰り返して言つて聞せた。

蠣殻町の住い手は手狭で、介抱が行き届くまいと言うので、浜町添邸の神戸某方で、三右衛門を引き取るように沙汰せられた。これは山本家の遠い親戚である。妻子はそこへ附き添つて往つた。そのうちに原田の女房も来た。

神戸方で三右衛門は二十七日の寅の刻に絶命した。

その日の酉の下刻に、上邸から見分に来た。徒目附、小人目附等に、手附が附いて来たのである。見分の役人は三右衛門の女房、伴宇平、娘りよの口書を取つた。

役人の復命に依つて、酒井家から沙汰があつた。三右衛門が重手を

負いながら、癖者を中の口まで追つて出たのは、「平生の心得方宜に附、格式相当の葬儀可取行」と云うのである。三右衛門の創を受けた現場にあつた、癖者の刀は、役人の手で元の持主五瀬某に見せられた。

二十八日に三右衛門の遺骸は、山本家の菩提所浅草堂前の遍立寺に葬られた。葬を出す前に、神戸方で三右衛門が遭難當時に持っていた物の始末をした時、大小も当然伴宇平が持つて帰るはずであつたが、娘りよは切に請うて脇差を譲り受けた。そして宇平がそれを承諾すると、泣き腫らしていた、りよの目が、判那の間喜にかがやいた。

侍が親を殺害せられた場合には、敵討をしなくてはならない。ましてや三右衛門が遺族に取つては、その敵討が故人の遺言になっている。そこで親族打ち寄つて、度々評議を凝らした末、翌天保五年甲午の歳の正月中旬に、表向敵討の願をした。

評議の席で一番熱心に復讐がしたいと言ひ続けて、成功を急いで氣を苛つたのは宇平であつた。色の蒼い、瘦せた、骨細の若者ではあるが、病身ではない。姉のりよは始終黙つて人の話を聞いていたが、願書に自分の名を書き入れて貰うことだけは、きつと居直つて要求した。りよは十人並の容貌で、筋肉の引き締まつた小女である。未亡人は頭痛持でこんな席へは稀にしか出て来ぬが、出て来ると、もし返討などに逢ひはすまいかと云う心配ばかりして、果はどうしてこんな災難に遇つたことかと繰り返してぐどくのであつた。日が窪から来る原田夫婦や、未亡人の実弟桜井須磨右衛門は、いつもそれを慰めようとして骨を折つた。

然るにここに親戚一同がひどく頼みに思つてゐる男が一人ある。この男は本国姫路にゐるので、こう云う席には列することが出来なかつたが、訃音に接するや否や、弔慰の状をよこして、敵討にはきつと助太刀をすると誓つたのである。姫路ではこの男は家老本多意氣揚に仕えている。名は山本九郎右衛門と云つて当年四十五歳になる。亡くな

つた三右衛門がためには、九つ違の実弟である。

九郎右衛門は兄の訃音を得た時、すぐに主人意氣揚に願書を出した。甥、女姪が敵討をするから、自分は留守を伴健藏に委せて置いて、助太刀に出たいと云うのである。主人本多意氣揚は徳川家康が酒井家に附けた意氣揚の子孫で、武士道に心入の深い人なので、すぐに九郎右衛門の願を聞き届けた。江戸ではまだ敵討の願を出したばかりで、上からそんな沙汰もないうちに、九郎右衛門は意氣揚から拵附の刀一腰と、手当金二十兩とを貰って、姫路を立った。それが正月二十三日の事である。

二月五日に九郎右衛門は江戸蠣殻町の中邸にある山本宇平が宅に着いた。宇平を始、細川家から暇を取って帰っていた姉のりよが喜は譬えようがない。沈着で口数をきかぬ、筋骨逞しい叔父を見たばかりで、姉も弟も安堵の思をしたのである。

「まだこっちはお許は出んかい」と、九郎右衛門は宇平に問うた。「はい。まだなんの御沙汰もございません。お役人方に伺いました。が多分忌中だから御沙汰がないのだらうと申すことで。」

九郎右衛門は眉間に皺を寄せた。しばらくして、「大きい車は廻りが遅いのう」と云った。

それから九郎右衛門は、旅の支度が出来たかと問うた。いずれお許が出てからと、宇平が云った。叔父の眉間にはまた皺が寄った。しかし今度は長い間なんとも言わなかった。外の話を色々した後で、叔父は思い出したように云った。「あの支度はもう、先へして置いてもいいぞよ。」

六日には九郎右衛門が兄の墓参をした。七日には浜町の神戸方へ、兄が末期に世話になった礼に往った。西北の風の強い日で、丁度九郎右衛門が神戸の家にいるうちに、神田から火事が始まった。歴史に残っている午年の大火である。未の刻に佐久間町二丁目の琴三味線師の家から出火して、日本橋方面へ焼けひろがり、翌朝卯の刻まで焼けた。「八つ時分三味線屋からことを出し火の手がちりてとんだ大火事」

と云う落首があった。浜町も蠣殻町も風下で、火の手は三つに分かれて焼けて来るのを見て、神戸の内は人手も多いからと云って、九郎右衛門は蠣殻町へ飛んで帰った。

山本の内では九郎右衛門が指図をして、荷物は残らず出させたが、申の下刻には中邸一面が火になって、山本も焼けた。

りよは火事が始まるとすぐ、旧主人の細川家の邸をさして駆けて行ったが、もう豊島町は火になっていた。「あぶないあぶない」「姉さん火の中へ逃げちゃあいけねえ」などと云うものがある。とうとう避難者や弥次馬共の間に挟まれて、身動もならぬようになる。頭の上へは火の子がばらばら落ちて来る。りよは涙ぐんで亀井町の手前から引き返してしまつた。内へはもう叔父が浜町から帰って、荷物を片付けていた。

浜町も矢の倉に近い方は大部分焼けたが、幸に酒井家の添邸は焼け残った。神戸家へ重々世話になるのは気の毒だと云うので、宇平一家は矢張遠い親戚に当る、添邸の山本平作方へ、八日の辰の刻過に避難した。

三右衛門が遺族は山本平作方の部屋を借りて、夢の中で夢を見るような心持になって、ぼんやりしている。未亡人は頭痛が起って寝た切である。宇平は腕組をして何やら考え込む。たどりよ一人平作の家族に気兼ねしながら、甲斐甲斐しく立ち働いていたが、午頃になって細川の奥方の立退所が知れたので、すぐに見舞に往った。

晩にりよが帰ると九郎右衛門が云った。「おい。もう当分我々は家なんぞはいらんが、若殿が旅に出て風を引かぬように、支度だけはして遣らねではならんぞ。」叔父は宇平を若殿若殿と呼んで揶揄っているのである。

「はい」と云つたりよは、その晩から宇平の衣類に手を着けた。

九日にはりよが旅支度にいる物を買に出た。九郎右衛門が書附にして渡したのである。きょうは風が南に変わって、珍らしく暖いと思っ